

# 壬生六齋念仏由来

## 3.空也堂系と干菜寺系、芸能六齋と念仏六齋

六齋念仏には二系統あります。**干菜寺系**(ほしなじけい)と**空也堂系**(くうやどうけい)です。

近世以前、六齋をやるには免許が必要でしたが、その免許を与える権限は2つの寺が持っており、どちらの寺から免許を受けたかによって、すべての六齋講はどちらかの根拠寺の傘下となる仕組みでした。干菜寺から免許を得れば干菜寺系、空也堂からなら空也堂系というわけです。免許の形式は、鏡札の様な木札や免状、太鼓です。



干菜山光福寺  
(叡山電鉄「出町柳」駅より東へ、田中上柳町)

まず、干菜寺系は、左京区田中の干菜山齋教院安養殿光福寺を本山とし、その由来は、同寺に伝わる『浄土常修六齋念佛興起』によれば、円爾辨円の弟子であった道空が師命で念仏門に転じ、天帝釈の示現を得て文永元年(1264)に開創したもので、翌年亀山天皇より六齋念佛総本寺の勅願を賜り、正和二年には、後花園天皇から常行六齋念佛の号を賜ったとなっています。

その後、永正十六年(1519)に六齋念佛総本寺の繪旨を受けました。



右端は、“干菜寺六齋”の絵を刻んだ碑

干菜寺の名前は、豊臣秀吉に、当時六齋念仏を行っていた月空宗心が召された際、今の窮状を表すために、干した菜っ葉をわざわざ進上してみせたことに由来するといわれています。秀吉はその後、六齋に手厚い保護を施しました。



明治44年4月22日 法然上人七百回忌で干菜寺系六齋が勢ぞろい

次に、空也堂系ですが、これは中京区蛸薬師通油小路西入の紫雲山極楽院光勝寺(現、空也堂極楽院)が本拠地で、由来は[項目の1](#)で前述した通り、空也を開創の祖としています。壬生六齋念仏は空也堂系の六齋念仏講です。



空也堂「六齋念仏」縁起

現在は、干菜寺の3つの末寺の1つである西方寺の六齋念仏が現行唯一の干菜寺系六齋であり、その他の六齋念仏はすべて空也堂系六齋という状況になっています。その理由として、干菜寺が後述の六齋の芸能化を認めなかったことが指摘されています。明治以前の記録では圧倒的に干菜寺系の数が勝っていました。

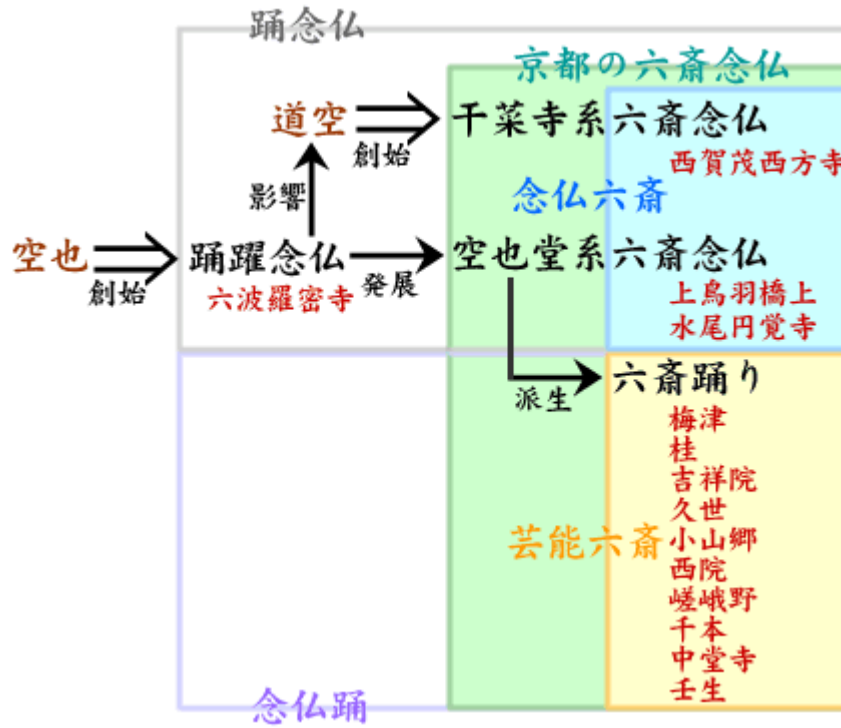
ところで、六齋念仏は徐々に、これまで見てきたような姿から変貌していきました。念仏とは関係のない流行曲の演奏などをやり始めたのです。そこで、六齋念仏には新たな分類が必要となりました。従来型と派生型の区別で、それぞれ、「念仏六齋」「芸能六齋」と呼びます。

**念仏六齋**はその名の通り、あくまでも念仏主体で、鉦をメインとして用い、太鼓がそれに加わるという形のもので、笛は入りません。これまで記述してきたのはこちらのことであり、そもそも「六齋念仏」とはこのようなものを指すのですが、芸能六齋との対比のため便宜上このように呼びます。この形式は、「鉦講」とか「空也念仏」と称することもあり、全国各地に伝えられています。壬生にも、壬生六齋念仏講中とは別に、鉦講があり、念仏曲を伝えています(別頁参照)。

**芸能六齋**とは、地唄や浄瑠璃等近世の流行り歌から取材した曲を六齋念仏の楽器で演奏できるように編曲して舞台で公演する郷土芸能で、民衆の娯楽として近世以降に発展してきたものです。六齋踊り、六齋囃子などとも称され、従来の六齋念仏から派生的に登場してきたものなので、厳密には六齋念仏とは別個のものとして扱うべきかもしれませんが、慣習的に六齋念仏と呼称されています。

京都市内で現行の六齋は、10団体の芸能六齋と4団体の念仏六齋(六波羅密寺の踊躍念仏を含む)です。従来は、農村単位で念仏六齋が奉じられるのが典型で、非常に多くの講が日常生活と密着して活動していました。芸能六齋はその狭間から創造された、人々の楽しみを第一義に行われるものです。時代の推移は生活様式の変化を余儀無くしましたが、それにともなう念仏六齋がその成立基盤を逐われ衰退していく一方、地域の祭的傾向を持つ芸能六齋はこれよりも多く残るといふ顛末になりました。

壬生六齋は芸能六齋ですので、まとめると、**空也堂系芸能六齋**ということになります。



※赤字は京都六齋念仏保存団体連合会に所属する現行の継承団体

[次へ](#)

[もどる](#)